令和八年度 第十回 きやま創作劇

紫の……

～俳諧文化の花を咲かせた 寺崎紫白物語～

脚本・演出：福永真理子

令和８年 12月13日（日）

1回目 11:30 開演（11:00 開場）
2回目 15:30 開演（15:00 開場）

会場：基山町民会館 大ホール

入場無料（全席自由）

お問い合わせ / 基山町まちづくり課 文化・スポーツ係 TEL：0942-92-7935
主催：きやま創作劇実行委員会、基山町、基山町教育委員会
本事業は『基山町歴史的風致維持向上計画』に基づく「歴史まちづくり普及啓発事業」として実施しています。

デザイン：副島葉月

■あらすじ

※寺崎紫白に関する資料が希薄なため、フィクションを織り交ぜ物語を描いています。

一六八八（元禄元）年。久留米藩領内に、お稽古帰りの武家娘たちがあらわれる。

その中に一人、熱心に本を読んでいる菊乃。年のころは一三・四。この娘こそ、のちの寺崎紫白だ。文学好きの菊乃は、同じ藩の娘・隆子に、「文学にのめり込みすぎだ」と言われ落ち込んでいた。そこへ菊乃の母・秋子があらわれる。俳句をたしなんでいる秋子は、落ち込む菊乃のことを俳句で『若菊の花弁にひかる　水の玉』と詠む。輝く未来があることを信じ、自分を信じ、「菊乃」の「道」を歩めと励ますのだった。

三年後の一六九一（元禄四）年。菊乃は一七になり、対馬藩田代領奈良田村庄屋の次男・平八に嫁入りした。奈良田村の人々にも歓迎される菊乃。平八は「菊乃と会うのは今回が初めてではない」という。そう、平八と菊乃は、三年前、久留米藩領で出会っていたのだ。奈良田村の庄屋と共に、奈良田八幡宮神官も務める寺崎家。平八は「このご縁は神様からの思し召し」と菊乃に言い、菊乃との縁を喜ぶ。文学好きという共通点がある二人は、万葉歌人・大伴旅人が基山に登って詠んだ和歌の話をする。平八は「和歌や俳句が持つ言葉の美しさ」に感嘆する。その平八の言葉に心打たれた菊乃は、以前、母・秋子が夢中になっていた俳句をやってみたいと平八に申し出る。ここから、菊乃の、俳句人生が始まるのだった。

5年後の一六九六（元禄九）年。舞台は長崎街道の間宿・木山口町。木山口は、小さな町場だが、酒屋・茶屋・駕籠屋・宿屋・若宮八幡宮が並び、賑わっていた。茶屋の娘・おうめや、酒屋の丁稚・くめ吉、かめ吉、売薬商人・千造、菊乃やお供のおまきが顔を合わせ、ひと時話の花が咲く。そこへ村娘のおやいが、兄・伊助のために酒を買いに来る。貧しい中でも兄のことを思うおやいに、菊乃は手を差し伸べようとする。と、そこへ伊助があらわれ、『恩の押し売りはまっぴら』と菊乃をはねつける。伊助とおやいの生い立ちを聞いた菊乃は、俳句を通して、二人の心を癒せないかと考える。そんな折、松尾芭蕉の高弟で、日田出身の坂本朱拙が博多に来ていることを耳にする。『朱拙に俳句を学び、この基肄養父の地に、心癒す俳句文化の花を咲かせたい』と心に決める菊乃であった。

その後、菊乃の妹・松音も、基肄養父・園部村の庄屋・木村与一郎に嫁いでくることになった。姉妹は再び同じ基肄養父で暮らすこととなり、松音も自然と俳句を詠むようになる。菊乃たちは本格的に俳句の道を進むため、菊乃は「紫臼」、平八は「一波」、松音は「紫青（後に紫貞）」、与一郎は「嵐州」と俳号を名のる。坂本朱拙を寺崎家に招き、俳諧の集まりをする紫臼。紫臼は、俳句の中に描かれた世界を、見事に読みとっていく。その才能に驚嘆した朱拙は、『俳句集を出さないか』と、紫臼に提案する。『とんでもないことだ』と恐縮する紫臼だったが、そこへ伊助があらわれ、紫臼の心を変えていくのだった。

文学が好きなだけのひとりの少女が、なぜ女性で、日本で初めての俳句集を出すことになったのか…。

紫臼は俳句を通して、なにを伝えたかったのか…。俳句集の題名に込められた思いとは…。

言葉の美しさを探求し、日常を、女性の目線で生き生きと詠んだ寺崎紫臼。俳諧文化の花を咲かせた紫臼の、静かで、しかし情熱的な人生が、今よみがえる。











■みんなの力を持ち寄って

創る きやま創作劇■

100名を超えるキャスト・スタッフ

全て、ボランティアでつくっています







